

3 路上ではみんなパートナー

題材設定の理由	交通に参加する者は誰もがパートナーとして思いやりやゆずりあいのある行動をとることが大切である。とくに幼児・児童や高齢者、視覚障害者や車イス利用者等に対しては、高校生として適切な対応を積極的にとり、安全な交通社会の実現に寄与しようとする態度を育成するために、本題材を設定した。
指導のねらい	1. 視覚障害者の立場を理解し、適切な対応がとれるようにする。 2. 点字ブロックの機能等を理解し、視覚障害者の交通安全を積極的に図るようにする。 3. 車イス使用者の立場を理解し、適切な対応がとれるようにする。
準備	・ワークシート（問題1、2）を人数分プリントしておく。

段階時間	指導事項	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	●本時のねらいと内容 ●ワークシートの利用方法	○本時のねらいと学習方法について説明を聞く。 ○ワークシートの利用方法について説明を聞く。	○身障者の立場に立って考えるようにさせる。
展開 (40分)	1. 視覚障害者への対応の仕方 2. 視覚障害者が通行上困っていることと、点字ブロックの機能 3. 車イス使用者への対応の仕方	○視覚障害者が道路を横断しているときにどのように接したらよいかについて、ワークシートの問題1の解答を通して学習する。 (1) 視覚障害者への声のかけ方 (2) 安全な道路横断への協力の仕方 (3) 視覚障害者が違法駐車で困っていること ○ワークシートの問題2の解答を通して、視覚障害者が道路を通行する際、何に困っているのか、また点字ブロックがいかに大事なものであるかについて理解し、通行を妨害しないためにどうすべきかを学習する。 ○車イス使用者に対する配慮や援助の仕方について、ワークシートの問題3、4の解答を通して学習する。 (1) 身障者用駐車スペースの使われ方 (2) 道路に障害物があるとき (3) 道路に段差のあるとき	○視覚障害者の身体に急に触れてはならないことを理解させる。 ○道路交通法上の決まりにも触れる。 ○視覚障害者は音などの周囲の状況と点字ブロックを頼りに歩いていることを理解させる。 ○違法駐車の際に気づかず杖を折ってしまったりケガをしたりする視覚障害者が多いこと、危険な車道を通行せざるをえないことなどを理解させる。 ○点字ブロック上での立ち話や駐車は視覚障害者の通行の妨げになることを強調する。 ○自転車を倒してしまったときの視覚障害者の気持ちについても触れる。 ○車イスの出し入れのために、身障者用には広い駐車スペースが必要なことを理解させる。 ○健常者が身障者用スペースを利用しようとしているのを見たら注意する勇気を持つよう強調する。 ○ワークシートの写真を見た感想や意見を発表させる。 ○困っている車イス使用者を助けるときは、必ず声をかけるようにさせる。 ○歩道に障害物があると車道を移動せざるをえず、危険なことを強調する。
まとめ (5分)	視覚障害者および車イス使用者の交通安全を進んで確保すること	○視覚障害者および車イス使用者の交通上の悩みや危険性を理解して、安全に交通ができるよう協力し、よいパートナーになれるよう心がける。	○視覚障害者および車イス使用者の路上での安全確保には、身障者のために具体的に何ができるかについて日頃から理解を深めるようにさせる。
評価		1. 視覚障害者や車イス使用者の立場になって交通安全を考えることができたか。 2. 視覚障害者や車イス使用者の交通安全を図るために適切な対応の仕方が理解できたか。	

路上ではみんなパートナー

問題 1

白い杖をついた人が横断歩道を渡ろうとしています。次の行動の中で間違っているものに印をつけましょう。

1. 信号が青になったのでいきなり手をひいて一緒に渡る。
2. その人に話しかけているのがわかるよう、そばに行って「青になりましたよ」と話しかける。
3. 赤信号だったが、車が来ていなかったので、自分は信号無視をして渡り始める。
4. 信号が青になったので、後ろからトンと背中を押してあげた。

問題 2

次の写真を見て、白い杖をついた人が何に困っているのか、自分たちにできることは何かを考えてみましょう。



写真 1



写真 2



写真 3

路上ではみんなパートナー

問題 3

大型スーパーなどの駐車場には、身障者用駐車スペースを設けてあるところがあります（写真1）。写真2も参考にしながら、身障者用駐車スペースにはどのような特徴があるのか考えてみましょう。また、写真3、4のパイロンは何のためか、そこにはどのような問題があるのかも考えてみましょう。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

問題 4

次の写真を見て何が問題なのか指摘してみましょう。



写真 1



写真 2

ワークシートの利用についての解説

問題 1

視覚障害者が道路を横断しようとしているときに、周囲の人がしてはいけないことを理解させる問題。

1.3.4 が間違っている。

1. →いきなり手をひいては視覚障害者は驚いてしまう。

3. →視覚障害者は耳をすまし、周囲の状況を配慮しながら待っている。
横断する人がいれば、もう信号が青になったもの、と思ってしまう。
信号無視はいつもしてはいけないが、特に視覚障害者が近くにいるときは絶対にしてはいけない。

4. →急に身体を触られるとびっくりする。必ず一声かけてから。

問題 2

視覚障害者が道路を通行するときに困っていることを理解させる問題。

写真 1

- ・やむをえず車道を歩くことになる視覚障害者。後ろから車が来ることもあり、駐車している車を手で伝ってギリギリの所を歩く。非常に危険。
- ・その他、掃除されていない車だと手や衣服が汚れるということもある。また、走行中の車に杖をひかれて杖が折れたり、転倒して後続車にひかれる、ということもある。また、歩道に車が停まっていることに気づかず杖で車をたたいてしまう。これで、車に傷をつける、などのトラブルが起こることがある。
歩道の、しかも点字ブロックに乗り上げ、駐車しようとする車を見たら注意する勇気をもつ。



写真 2

- ・ハッチバックが開いているのは杖では感知できない。何もないと思って歩き、ハッチバックにぶつかってケガをする。
ハッチバックを開けたまま駐車はしない、ということが大切。



写真 3

- ・点字ブロックの重要性を理解させる問題。
- ・自転車が点字ブロックの上にあるため、邪魔で歩きづらい。もし自転車を倒したとしても、自分1人では起こせない。駐車中（走行中でも）の自転車の車輪に杖がからんで折れることもある。
点字ブロックの上には障害物を置かないようにする。

写真提供（問題含む）
筑波大学 徳田克己教授

問題 3

身障者用駐車スペースについての問題。

- ・身障者用駐車スペースは店の出入りに近いところに設置されている。
- ・車イスで乗り降りするために十分なスペースが確保されている。
- ・写真 3、4 は身障者用駐車スペースを健常者が使うことを防ぐ目的でパイロンが置いてあるのだが、これでは、実際に身障者が利用する際、いちいちパイロンをどける必要があり、大変不便。

問題 4

車イス利用者が歩道で困っていることを理解させる問題。

1. スピードを落とさずに近づいてくる自転車は車イス利用者にとっては非常に怖いもの。よけようとして土手に転がる危険もある。自転車ですれ違うときは徐行する、自転車を降りて押すなどの配慮が必要。
2. 車イスは少しの段差でも転んでしまう可能性がある。歩道に乗り上げた車を迂回するために段差のある歩道をいったん降りて車道に行くのは危険だし、また歩道に戻るといっても大変な労力が必要。

先生のための資料

障害といっても、知的障害や、聴覚障害、半身麻痺などさまざま。ここでは、一見して障害があることがわかる「全盲の視覚障害者」と「車イス使用者」について、彼らが困っていること、それについてどのように対処すればよいのかを理解させる。

視覚障害者の 道路横断について 知っておくべきこと

視覚障害者には、全盲者と弱視者がいる。全盲者は歩行時には白い杖（道交法上では、黄色い杖の場合もある）を持っているが、弱視者は持たないことが多いことを前提に、ここでは白い杖を持った視覚障害者について学ぶ。

視覚障害者は点字ブロックや周囲の状況（音や匂い）を頼りに道路を横断している。周囲の音に感覚をすましているため、急に腕をつかまれたり、後ろから押されたりすると、びっくりして、怯えてしまう。手を差し伸べるときは、必ず、「一緒に渡りましょうか」など声をかけてから。また、話しかける際、その人に話しかけているのがわかるよう、後ろからでなく、正面や横から、はっきりと声をかけるようにする。

自転車で、歩行中の視覚障害者の脇を通り過ぎるときも、徐行する、自転車を降りて押すといった配慮をしなければならないことを教える。全盲者だけではなく、弱視者もいるため、夜間、自転車のライトをつけて走ることも重要なことである。

視覚障害者が赤信号で待っているときに、「車が来ていないから」と信号無視をすると、青になったと思ってついていく可能性があるため、大変危険である。

さらに視覚障害者の道路横断について理解を深めさせるには、「参考／授業の展開別案1」のようなことも考えられる。

授業の展開別案 1

視覚障害を疑似体験するため、横断歩道の音をカセットテープに集め、教室で聞かせる。青信号と赤信号の違いがわかるよう、耳をすませ、違いがわかったかと尋ねる。

→視覚障害者が音を頼りに道路横断するのを疑似体験し、いかに神経を張りつめているかを理解させる。

視覚障害者の歩行について 知っておくべきこと

視覚障害者は、杖を頼りに歩行している。通り慣れた道ならかなりの速度で、杖を強くたたきようにしながら歩いている。そこへ違法に歩道に乗り上げ駐車した車などがあると杖で車を傷つけたり、杖が折れる、といったトラブルが起こる。

また、視覚障害者の5人に1人が、開いているハッチバックや車からはみ出した積載物などにぶつかってケガをする経験をしたことがあるという。

点字ブロックについて

点字ブロックは、視覚障害者にとって大切なものだが、自転車が置かれていたり、その上で立ち話をしている人がいたりすると本来の目的どおり使用できないことが多い。自転車が置かれているときはハンドルなどが身体にあたって痛い思いをするし、もし自転車が倒れてしまったとしても自分1人では起こせない。たまたま自転車の所有者がその場にいれば、視覚障害者の方が、「ごめんなさい」と謝ってしまう。「自分は悪くないのに」と不快に感じる視覚障害者は多い。また、点字ブロックの上をずっと歩いていると足が疲れるので、点字ブロックを杖で確かめながら、その横を歩く人もいる。点字ブロックの上だけでなく、左右50cmは駐車したりしてふさがないようにすることが必要である。

身障者用駐車スペースについて

大型スーパーなどに設置されている身障者用駐車スペース。短時間だから、他に空いてないから、と安易に駐車する人が後を絶たない。身障者用駐車スペースの特性を理解し、自分がドライバーになったときに駐車しないのはもちろん、家族や友人が駐車しようとしたら「そこに駐車してはいけない」といえる勇気をもつ。

身障者用駐車スペースは、車イス使用者が車イスを出し入れするのに十分な広さ(通常の広さの1.5倍)が確保されている。また、店の出入りに近い便利なところにある。車イス使用者が健常者用の駐車スペースに駐車すると、車イスの出し入れができなくなる。

また、健常者が使用しないようにと、身障者用駐車スペースにパイロンを立ててあるところがあるが、車イス使用者がそこに駐車しようとする、車イスを降ろしてそれに乗り、パイロンをどけて、車イスから自動車に乗り移り、そして、駐車し、と大変な思いをすることになる。身障者用駐車スペースは常に開けておくようにする。

車イス使用者が困ること

車イスは幅があるため、歩道に乗り上げ駐車している車や、迷惑駐車の自転車などがあると、歩道を通行できない*。車道に出るにも、段差がある場合は、段差のないスロープまでいったん戻らなければならない。しかも車道を車イスで移動するのは危険でもある。歩道は歩行者だけでなく車イスも通ることがあるということを理解させる。

また、善意から、段差で困っている車イスをいきなり後ろから押す、という行為も、車イス使用者にとっては驚き、パニックになることもある。障害の種類によっては、急な動作に対応できず、車イスから転げ落ちてしまうこともある。必ず「押しましようか」と声をかけ、「お願いします」といわれて初めて車イスに手をかけるようにする。

さらに、車イス使用者の交通状況について理解を深めるために「参考／授業の展開別案 2、3」のようなことも考えられる。

*道交法第47条2では車両は駐車するときは「道路の左側端に沿い、かつ他の交通の妨害とならないようにしなければならない」としている。(罰則) 15万円以下の罰金

授業の展開別案 2

実際に車イスで生活している人に話をしてもらい、どういうことに困っているか、どんな危険な体験をしたか、ということ語ってもらう。

授業の展開別案 3

学校に車イスがある場合、平らなところを実際に乗って体験してみる。そして、次に歩道のラインをひき、迷惑駐車を想定して自転車をおいておく。歩道から出ずに自転車をよけて通ることの難しさを知る。

高齢者についても この項で考えてみよう

健常者でも高齢になると、足腰が弱くなり、電動車イスを利用する人も多い。この項では、あわせて、高齢者についても学んでおくとよい。

車イスだと目線が低いと、前方から来るものが見えにくいことがある。また、高齢者が歩いている場合も、目線を下に向けている場合が多いので、周囲の状況に気がつきにくい。自転車やドライバーなど周りが前もってスピードを落とすなどの対応をする必要がある。

高齢者とぶつかると、大きなケガにつながる可能性が高いことにも留意する。

調べ学習について

今回学習したことを踏まえ、生徒に宿題として〈調べ学習〉をさせ、次回の授業で発表させれば、点字ブロック、身障者用駐車スペースの問題について、より身近な問題として理解を深めることができる。

1. 自分の町にある点字ブロックを探しだし、どのような意図でそこにあるのか、実際にその点字ブロックが機能しているのかどうか、見ておきましょう。
2. 自分の町にある駐車場（スーパー、レストランなどでもよい）で身障者用の駐車スペースを探し、それがどのようなものか、どのように使われているのかを見て、考えてみましょう。

障害のある人が、交通場面で何に困っているのか 具体的に「知ること」から始めよう

徳田克己 筑波大学社会医学系教授、臨床心理士

「思いやり」ではなく、まず「知ること」

他人に対して「思いやりを持とう」とはよくいわれることです。障害者についても「思いやり、福祉の心を持って接しよう」と。しかし、この「思いやり」とは何でしょうか？

こんな話があります。私の大学では、地域のボランティアの人たちが、視覚障害の学生に図書館で朗読サービスをしてくださっています。私の研究室にも視覚障害の学生がいて、ボランティアの方が研究室まで学生を迎えに来てくださいます。「どうして迎えに来られるのですか」と尋ねると、「思いやりだから」との答え。別のボランティアの方は「自分で来てください」といいます。その方は「世の中には危険なところが多いので歩く練習をしておかないといけない。大学の中はそれほど危なくないから、大学の中では歩く練習をしておくべきです。だから時間がかかっても、研究室から図書館まで歩いてくるように、というのです。それが思いやりだと思うのです」とおっしゃる。

つまり、同じ「思いやり」の気持ちからといっても、まったく正反対の行動に出ることもあるのです。自分なりの「思いやり」を押し付けるのではなく、障害者が、実際の交通場面で何に困っていて、どんな手助けを必要としているのか、ということをもまずは具体的に知ってほしいと思います。

正しい認識から、適切な行動へ

障害者の人たち（白い杖を持っていたり、盲導犬を連れている視覚障害者や車イス使用者）に出会うのは、道路や歩道、信号待ちといった、交通場面であることが多いだろうと思います。視覚障害者は点字ブロックや周囲の状況（音、においなど）を頼りに、神経をときすませながら歩行をしています。そのことを知った上で、点字ブロックの上で立ち話をしたり、上にモノを置いたりしないようにしてください。手助けしたい、という気持ちから、急に背中を押したり、手をとったりするのもやめてください。まずはきちんと声をかけてから。

また、車イス使用者は、歩道に乗り上げた車の駐車、迷惑駐車などで歩道が通れず、仕方なく危ない車道を通らねばならず、事故にあうといったこともよくあります。どうかそういう事実を知り、歩道をふさがないようにしてください。

そして、この章で学んだことを、家に帰って家族の人たちにも話してあげてください。世の中にどんどん広まっていけば、障害のある方も、安心して街の中に出ていき、みんなと同じように買い物をしたりカラオケに行ったりという楽しい生活を安全にできるようになるのです。そんな日が一日も早くくることを願っています。